

【書評】木島泰三著『スピノザの自然主義プログラム：自由意志も目的論もない力の形而上学』（春秋社、二〇二一年）：力の概念分析によるスピノザ解釈への挑戦

SATO, Masato / 佐藤, 真人

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / HOSEI TETSUGAKU : BULLETIN OF HOSEI SOCIETY FOR PHILOSOPHY

(巻 / Volume)

19

(開始ページ / Start Page)

79

(終了ページ / End Page)

82

(発行年 / Year)

2023-12-29

【書評】

木島泰三著 『スピノザの自然主義プログラム——自由意志も目的論もない力の形而上学』（春秋社、二〇二一年）

力の概念分析によるスピノザ解釈への挑戦

佐藤真人

『エチカ』でスピノザが作用因と結果の因果律による決定論的考察を極限まで推し進め、目的論と自由意志の存在をあらゆる面から否定したことは周知の事実であろう。本書は英語圏の研究、とりわけ分析形而上学の切り口からスピノザ哲学の骨格である因果律を論じること（第Ⅰ部）を経糸とし、因果の連鎖に現れる個物の存在と行為を基礎づける力のあり方の考察（第Ⅱ部、第Ⅳ部）を緯糸として編まれてるのが第一の特徴である。力の概念を論じた哲学者はもちろんスピノザだけではないが、本書ではスピノザがアリストテレスのように可能態や目的論においてではなく、常に必然的かつ「現動的」なものとして力を考えていたことが最も重点的かつ重層的に考察され、スピノザ哲学を「力の形而上学」として考えるための独自の分析を幾重

にも積み上げた、きわめて意欲的な研究成果が展開される。第Ⅰ部では、英語圏の先行研究との豊富な比較検討によって、内在的因果と他動的因果によって織り成されるスピノザの因果律を、結果に対して「何かを行うもの」という意味での「行為者因果」として解釈する。スピノザにとって、実体とは神という一存在者のみに当てはまる概念なので「実体因果」の用語は適切ではないこと、また、目的論や自由意志論をスピノザが徹底的に排除したことに基づき、スピノザの因果律を現代の「行為者因果説」を適用して分析したことに、本書の方法論的な独自性がまず見られる。

この解釈に基づき、因果律に現れる個物の存在を支える力 *conatus* や傾向性 *determinatio* は、神の力の現れであ

る以上は、抽象的あるいは可能的な本質ではなく、あくまで存在と行為において現実的かつ必然的(さらには現動的)に顕現する本質である、という本書の主張の核を成す考察が第Ⅱ部以降で展開する。広範な文献の読解に支えられ、縦横無尽に組み立てられていくこれらの考察には著者の独自の議論が遺憾なく発揮され、本書の白眉と言える内容になっていく。分析形而上学という、スピノザ解釈の本流とは言い難い研究成果を大胆に取り入れつつ、独自の解釈を次々と提示する本書は著者渾身の一作であり、その斬新な主張の数々には著者の魂の力そのものを見るようである。

そして、大胆な解釈を提示する研究には議論を喚起する力が必然的に伴うが、本書もその例外ではない。読み進めるうちに多くの疑問が生じたので、いくつかを下記したい。まず方法論について。現代分析哲学の「行為者因果」説の適用が筆者独自の方法論だが、その意義が評者には充分に理解できなかった。筆者自身も述べるように (p. 136, p. 167)、原因とは「結果に働きかける原因」である作用因に他ならなかったスピノザの因果律には、単に「作用因による因果」の考えを適用したほうが見通しがよいのではないか。「行為者因果」の概念をスピノザに適用することの可否に疑問が残る以上、そのような用語の使用はかえって問題の複雑化を招来しかねないのでは、との懸念が拭いき

れなかった。

個体が諸原因と協働して産出する結果が「個体の形相」であり「高階の変状」である(例えば人間の歩行といった行為は人間の形相に相当する)という筆者の主張 (p. 151-177) も理解が困難であった。人間の歩行は人間身体が変状した結果としての身体の様態であって、形相とは言えないであろう (E2A4 & A5, etc.)。

コナトウスをニュートンの自然法則における慣性概念と関連づけた考察では(第六章)、ニュートンと結びつける意義について疑問が残った。というのも、ニュートンの慣性概念の源がデカルトの自然法則であったように (p. 174)、スピノザのコナトウス概念における慣性的な考えの源も、おそらくデカルトではないかと思われるからである(スピノザが註釈を施したデカルトの『哲学原理』にコナトウスの語は頻出する[第二部二六項・第三部五六項、五七項 etc.])。

また、「スピノザにおいてリアリティを最も基礎的なレベルで決定しているのは、慣性運動と不規則な衝突を際限なく繰り返し広げる、無限に多くの最単純物体の集合体」(p. 166) という記述では、第一に()での「リアリティ」の意味が不明瞭であり、第二に作用因による必然的世界を「慣性運動と衝突による物体の集合体」に還元することが

果たして適切なのか、との疑問が残った。事物 *res* には当然ながら精神も含まれるからである。

そして、個物のコナトウスの発現である自己保存において、著者は「限定的」と付言してはいるものの、スピノザが神のみに（したがって実体のみに）厳密に帰す自己原因の概念を適用しているが（pp. 181-182）、これは多くのスピノザ研究者にとって問題となる解釈ではないだろうか。個物の自己保存を「限定的な自己原因」と言うことが可能なら、実体の様態である個物は「限定的な実体」（さらには「限定的な神」とまで言えることになるからである。

コナトウスはたしかに個物の現実的本質であるが、それはあくまで「自己の有に固執する力」「行為への力」である以上、個物を「コナトウスそのもの」（p. 197）と同一視するのも行き過ぎではないか。力と主体を同一視するスピノザの論拠として『形而上学的思想』IIcを筆者は挙げているが、そこでスピノザは人間精神を意志と同一視し、精神は「考えるもの：すなわち肯定し否定するもの」であり、それは「肯定し否定する等しい力をもつ」と言明する。精神は力または本質をその内にあくまで「もつ」のであって、それらと同一視されるわけではないだろう。

さらに、偶然的と可能的の定義（E4D3を4）に基づき、これを筆者の言う「可能的な力」概念に適用して分析する

こと（第十・十一章）の妥当性にも疑問が生じた。上述のスピノザの定義は、両者の内容の相違がもたらす人間感情の強さの相違を説明することが主眼であるように思われるからである（可能的な事物は、事物の未来の存在を定立する事柄を表象するため、偶然的な表象が惹起する感情よりも激しい感情（期待あるいは恐れ）を惹起する [E4P12]）。『エチカ』第四部は感情の力がテーマであって、これを分析形而上学の手法で「可能的な力」ないし「可能な行為」（p. 233 sq.）として読解することは果たして可能なのか（さらには第十章（特に第四節）の解釈そのものが成立しているのか）との疑問が払拭できなかつた。

最後に、本書の題名である「自然主義プログラム」の定義が不明確なまま終わっているのがきわめて残念だった。自由意志と目的論を排除した必然主義が「自然主義」を意味することは自明ではないからである。その説明のためには、スピノザにとって自然とはいかなるものかを詳細に論じる必要があるが、それが不十分なまま終わった（「神あるいは自然」「自然の共通秩序」といった語は現れるが、主眼はあくまでその中の個物と力の説明にある）本書の題名は、副題の「力の形而上学」のほうが内容を適切に表すのではないだろうか。

本書の議論には難解な箇所が多く、以上の諸疑問は評者

の読解不足や誤解によるかもしれないが、本書の斬新な分析ゆえの議論喚起力に起因するところも多いと思われる。これらの疑問によって本書の独自の考察の価値が貶められるものではないこと、それどころか、本書は今後のスピノザ研究の一層の活性化に資する重要な成果であることを最後に付言しておきたい。